

〈報告〉

発展途上国へのスポーツ援助の社会的影響に関する研究

—青年海外協力隊モルディブ共和国 F 島での活動から—

高橋 良明*;**・北村 薫**

Social impact of Sport development: through activities of the Japan Overseas Cooperation
Volunteers in island F in Republic of Maldives

Yoshiaki TAKAHASHI*;** and Kaoru KITAMURA**

1. 初めに

筆者は、2004年7月から2006年7月「体育教育の普及」と「生涯スポーツ振興」を目的にモルディブ共和国 F 島において青年海外協力隊体育隊員として活動を行ってきた。配属先は、F 島の学校（1年生～10年生、全校生徒100名前後）であった。筆者が行った活動が任地へどのような影響を与えたのかという疑問が、この研究に着手した動機である。

主な活動内容は、学校内では体育授業の指導、現地教師への指導法指導、クラブ活動指導、学校スポーツ行事の企画・運営、学校外では保護者への健康運動教室であった。どの活動も、筆者帰国後も継続されることが期待されていたため、すべての活動を現地の教師と共に活動する様にしていた。

援助関係の先行研究を見ると、先進諸国から途上国へ行う援助活動により、さまざまな社会的影響を引き起こすことが明らかになっている¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾。それは、時に当該地域に負の影響を与えることもある。そこで本研究では、筆者の事例を基に発展途上国へのスポーツ援助がどのような社会的影響を持つかを明らかにし、今後の体育・スポーツ援助活動のあり方を提言することを目的とした。

2. 方法

2007年8月（活動終了1年後）と2008年8月（活

* 横濱市立金沢高等学校

Kanazawa high school

** 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科

Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

動終了2年後）の2回、モルディブ共和国 F 島においてフィールド調査を行った。

調査対象者は、F 島民。調査項目は、筆者が行った活動の継続状況、援助活動の効果、援助側が予期していない好・悪影響。調査技法は、参与観察とインフォーマルインタビューである。

3. 結果および考察

3.1 体育授業

筆者が赴任する以前の体育授業は、現地教師たちは、子どもにボールを渡し、子どものやりたい遊びをさせ、教師は見ているのみであった。つまり、モルディブ共和国の体育科カリキュラムとは違う授業を展開していた。

2007年、2008年のフィールド調査では、現地教師たちは、授業を「導入」「展開」「まとめ」にわけ、授業を指導していた。また、インタビューの中で現地教師から「筆者から、子どものやる気をそそる授業方法を学んだ」「スポーツが我々の生活にはなくてはならないのだと学んだ」という意見を得た。したがって、2年間の協力隊活動の中で、現地教師の体育授業指導力は向上したと言える。

3.2 スポーツ行事の企画・運営

筆者が赴任する以前の F 島学校のスポーツ行事は、男子はサッカー大会、女子はバレーボール大会と男女や年齢に分かれ学校スポーツ行事が行われていた。そこで、筆者は活動中、全校生徒で行われる、日本式の運動会を企画し運営を行った。

筆者帰国後、2007年は、運動会が開催された。2008年は、運動会は企画され、練習も行ったが、中止となっていた。中止になった理由は、高学年の一

部の生徒が、運動会の練習日にピクニックにでかけ、休んだため教育的理由で中止にしたという。実施の意図はみられたことから、運動会は定着しつつあると考えられる。

3.3 健康運動教室

健康運動(ウォーキング)は、2007年、2008年ともに、数名の女性たちにより継続されていた。筆者が赴任以前は、彼女たちは、日常的に運動することが健康によいということは理解していたが、どのような運動を行えばよいのかわからなかったという。

活動当初、彼女たちは島の道をウォーキングするのを照れながら行っていた。しかし、今(2008年8月)は誰も見ないから恥ずしくないとのことである。イスラム社会では伝統的に、女性は男性に従属的であり、男性は女性を隔離してきた³⁾。したがって、イスラム女性が堂々とウォーキングし始めたことは、大きな変化だと考えられる。

3.4 クラブ活動

F島学校初のスポーツ系クラブ活動(水泳部・陸上部)は、2007年、2008年共に継続はされていなかった。ただし2008年8月に開かれた、「Inter School Athletics Competition」で、19歳以下円盤投げにおいて、首都マーレへ進学した陸上部の卒業生が優勝し、ナショナルチームに選出された。これは、援助する側が意図しなかった影響と言える。

しかしながら、水泳指導は、ほとんど効果はなかった。その理由の1つは、筆者が展開した指導内容に問題があったと考えられる。水泳指導は、近代4泳法(自由形・背泳ぎ・平泳ぎ・バタフライ)の習得を目標に活動を展開していた。2008年フィールド調査のインタビューの中で、40代男性は「モルディブ人にとって海は身近な存在、船が沈没した時に、泳げれば助かる。泳げることはとても大切なのだ」と語っている。つまり、F島民は水難事故に対応できる水泳を求めているのである。したがって、筆者が行った水泳指導(近代4泳法の習得)は現地社会の文化を無視した一方的な援助活動であったと言える。

3.5 他の島からの嫉妬心

F島の近隣の島々の島民は、F島の開発状況(店舗数や子どもの学力)が進んでいるため、F島に対して嫉妬心を持っている。2008年フィールド調査のインタビューの中で、日本の青年海外協力隊員が、F島のみで活動していることに対しても、他の島の島民が嫉妬しているという意見が得られた。したがって、F島でのスポーツ援助は、他の島からの嫉妬心を助長させたと考えられる。

4. 結 論

モルディブ共和国F島でのスポーツ援助は現地

社会にプラスの影響と効果を与えているが、近隣の島々からの嫉妬心を助長させるという問題点も有している結論付ける。

続いて、本研究結果より、今後の体育・スポーツ援助活動のあり方のへ2点提言する。本研究ではF島周辺地域からF島に対しての嫉妬心が確認されていることから、援助の計画を練る際は、周辺地域の人々がどう思うのか配慮するべきである。

次に、現地教師と共に活動を行った体育授業やスポーツ行事の企画運営の活動が継続しているのに対し、現地社会の文化を無視し、一方的に指導を行った水泳指導は効果がなかった。このことから、技術移転を目的とするスポーツ援助活動では、相手国側の文化に配慮し、配属先の同僚と共同で援助活動を行う方がより効果的であると言える。

5. 今後の研究課題

モルディブ共和国F島へのスポーツ援助の真の社会的影響が明らかにするには、援助に関係した人物を追跡調査する必要がある。特に、体育授業指導力が向上している現地教師たちの今後の体育授業を指導の展開や、首都に進学していく教え子のその後の人生を追うことが重要であろう。すでに教え子の中にはスポーツの指導にかかわっている者もあり、継続的な観察調査が研究の発展につながると考えられる。

(当論文は、平成20年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の修士論文を基に作成されたものである)

参 考 文 献

- 1.) 小林 勉：スポーツが触発する国民意識への新たなモメント、国際開発研究フォーラム、35、2007
- 2.) 小林 勉：開発戦略としてのスポーツの新たな視点：「正統性」をめぐる組織と「現場」の問題、体育学研究、45、707-718、2000
- 3.) 九頭見和夫、モルディブの女性たち—イスラム文化理解の視点から—、福島大学生涯学習教育研究センター年報、第6巻、2001
- 4.) 宗像 朗：ミクロレベルの村落開発プロジェクトがもたらす社会的影響。佐藤寛編 援助の社会的影響、第1版、37-62、世界思想社：京都市、2005
- 5.) 高根 務：農村開発プロジェクトと社会文化的要因、佐藤 寛 援助の社会的影響、第1版、143-163、アジア経済研究所：東京都、1994

(平成21年3月31日 受付)
(平成21年3月31日 受理)